

消 息

樋山先生のご退職にあたって

樋山健介先生は、選択定年により2014年3月末日に早稲田の杜を去られました。お送りする私どもとしては大変残念なことです。先生ご自身の退職後の計画に基づくものであり、第二の人生でのご健闘を心よりお祈りしたいと存じます。

今回、先生をお送りする消息記事を執筆するにあたり、樋山先生のご研究の本筋である中国語に関しては小川が執筆し、産業経営研究所における中国研究プロジェクトについては川邊信雄先生に依頼することに致しました。そのため異例の構成となりましたが、樋山先生のご研究、人となりをお伝えするためであるとご諒解頂ければ幸いです。

早稲田大学商学部教務主任（学生担当）

小川 利康

中国語教育への真摯な情熱

樋山健介先生は選択定年制を選択され、御定年より1年早く2014年3月末日に早稲田大学商学部を退職されました。先生は1990年の着任以来、商学部における中国語教育の充実のため、四半世紀にわたり尽力され、その礎を築かれま

した。

先生は1964年4月に早稲田大学第一商学部に入學され、六角恒広、横山宏両先生（故人）のもとで中国語を学ばれました。学部卒業後、堺商事で社会人を経験された後、中国への思い已みがたく、(社)中国研究所附属中国語研修学校、日中学院で中国語教育に従事されます。その後、中国国務院專家局の招聘により、日本語專家として、80年より遼寧大学で2年間、北京外語学院分院、国際関係学院でも1年ずつ教壇に立たれました。当時の中国は、文化大革命こそ終息したものの、中国共産党内部における鄧小平ら改革開放派の権力基盤も脆弱な時期でした。昨今の中国とは異なり、純然たる社会主義国での生活は、頼れる者もない外国人にとって困難の連続であったろうと思います。しかし、当時の中国の学生は厳しい関門を突破した優秀な者ばかりで、みな海外に雄飛することを夢見て、寝食を忘れて勉学に没頭していました。教師、学生双方が厳寒の地で情熱を傾け、切磋琢磨し、数々の優秀な研究者、ビジネスマンが巣立っていったそうです。

日本語專家として活躍された先生は、1984年2月に北京大学中文系に編入學され、改めて中国語文法研究の道を歩まれます。中国人に日本語を教えることが契機となり、中国語をより深く理解しようと先生は志を立てられたのでした。86年1月まで、2年間にわたり陸儉明先生に師事して現代漢語研究に没頭されました。

6年間にわたる中国滞在を終え、日本に帰国された先生は86年4月より早稲田大学理工学部非常勤講師、翌年4月より商学部非常勤講師として中国語を担当され、90年4月には商学部専任講師に着任されました。母校に迎えられた先生の教育研究にける意気込みは想像するに難くありません。1990年8月には世界漢語教学学会で「句首的处所词语带“在”的存现句」（「文頭場所詞で『在』を伴う存現文」）と題する論文を發表され、中国語文法研究を進められる一方、社会科学研究所（のちにアジア太平洋研究科に発展解消）での中国部会にも兼

任研究員として参加され、現代中国語語法研究だけでなく、広く中国地域研究にも精励されました。92年4月には助教授に昇任され、93年4月からは交換研究員として再び曾遊の地である北京大学で研究生活を1年間過ごされますが、今回は中文系ではなく、経済系に籍を置き、中国経済研究に取り組み、以後中国語研究と二方面の研究に従事されることとなります。95年には中国経済に関する研究として「郷鎮企業の地域分布と地域経済圏」を現代中国学会全国大会で発表されました。翌96年秋には横山宏先生の御定年を記念し、日本現代中国学会全国大会の開催会場校を引き受け、全国から研究者が集まる大きな学会を無事開催することが出来ました。先生は大会の模範的な運営ぶりを高く評価され、同学会理事にも就任されました。

その後展開される産業経営研究所でのプロジェクト研究については川邊信雄先生の御文章にお譲りするとして、ここでは1999年より始めた中国語基本単語テストについて触れておきたいと思います。

商学部中国語クラスは1990年代以降増え続ける履修者に対して、クラスの増設が間に合わず、90年代後半は1クラスの履修者が常に45名前後であるため、十分な指導が行き届かず、学生の基礎学力低迷に悩まされていました。クラス数の増加により、担当教員間で指導方針を統一するのも困難であるため、統一教科書使用も検討しました。しかし、先生は担当教員の個性を活かすためには教科書を強制するべきではないとの考えから、最低限徹底して教えるべき共通項として基本単語を選定するという方針を示されました。それが「中国語基本単語500」です。この単語リストに基づいて毎年10月末に一年生全体を対象として統一試験を実施し、不合格者には再テストを実施しました。当初は不平不満の声も多く、平均点も惨憺たるものでしたが、年を重ねるごとに定着し、平均点も上昇しました。

2005年4月には改訂版『中国語基本単語帳』を刊行しました。簡にして要を得た単語帳は、中国語学習必携書として商学部生に長らく愛用され、毎年実施

する統一単語テストも安定した高い合格率を維持し、中国に長期留学する学生も増加しました。現在、多数の卒業生諸君が中華圏で活躍しており、その成果は明らかです。教員それぞれが個性を発揮しつつ、同時に学生の学力をしっかり担保するという先生の基本理念が商学部の中国語教育を成功へと導いたといえるでしょう。13年4月、2年生向け語彙を追加した改訂二版『中国基本単語帳』も完成し、更なる進化を遂げています。

以上のように、商学部における中国語教育に果たした先生の功績は多大なるものがあります。今後、グローバル化が進むなかで大学における中国語教育のあり方も大きく変貌を遂げざるを得ませんが、今後も商学という専門性と中国語教育による多元的文化理解という二つの課題と真摯に向き合い、学部の発展に貢献したいと考えております。

最後になりましたが、先生の長年に及ぶご指導とご貢献に対し、改めて感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。先生の益々のご健康を心よりお祈り致します。
(小川利康)

貫いた実証主義

早稲田大学名誉教授・文京学院大学学長

川邊 信雄

樋山健介先生が2014年3月末をもって、早稲田大学を退職されました。樋山先生は1945年の早生まれですので、定年の70歳までもう1年在職期間がありましたが、選択定年制に基づいて退職を決められたようです。

樋山先生は、1990年4月に早稲田大学の商学部へ赴任されました。同じときに、八巻和彦先生と私が赴任しています。3人はいわば同期の櫻ですので、互

いに何か特別な親しみを感じています。特に私にとっては、樋山先生は早生まれのため学年は1年上ですが、同じ終戦の年の1945年生まれであり、2人とも第一商学部で学んだ仲なので、言葉では言い尽くせない親しみを感じてきました。

樋山先生は、第一商学部の学生時代から中国語に力を入れ、学生時代に2年間、会社勤務の時期に2年間、日中学院に通っておられたということです。実社会で3年半働かれた後、中国語・中国研究に志を固められ、中国語教育の道に進まれました。その後、中国では北京大学をはじめいくつかの大学で、研究だけでなく日本語も教えられたりもしておられます。商学部に着任される前には、すでに早稲田大学の理工学部や商学部などで非常勤講師をされていました。その中国語の力については、学会などでも高い評価を得ておられました。特に発音などは、私のゼミの中国人留学生によれば、中国電台のアナウンサー・レベルということです。

周知のとおり、商学部は伝統的に外国語の学習に力を入れてきました。これは、中国語についても例外ではありません。当時は、六角恒廣先生や横山宏先生といった錚々たる先生方が、中国語を教えておられました。樋山先生はこうした先生方の後任として、商学部の中国語教育の伝統を継ぐために招聘されたわけです。ただ、1949年に中国で共産主義政権が成立して以後、国が閉鎖された状況でしたので、樋山先生が赴任された当時の商学部の学生たちの中国や中国語に対する関心は決して高くはありませんでした。

ところが、中国は1978年に改革開放政策を採用し、さらに1992年鄧小平の「南巡講話」以後、市場主義経済を取り入れ急速に発展しました。1990年代には「世界の工場」として、さらに2000年代に入ると「世界の市場」として、世界のビジネスの注目を浴びる新興国となりました。

そのため、商学部の学生たちも中国や中国語に大きな関心を払うようになりました。中国語の履修学生はまさにうなぎ上りに膨れ上がりました。こうした

状況に対応するために、商学部の中国語教育の規模拡大を図る必要性が生まれ、小川利康先生、宇野和夫先生、尹景春先生、中村みどり先生が採用されることになりました。こうした、急拡大した商学部の中国語の教育研究を牽引されてきたのが、まさに樋山先生だったのです。また、樋山先生は商学部のみならず大学院商学研究科でも中国語文献研究を担当されています。その意味では、商学大学院にとって重大な貢献をされ、確実に足跡を残されたということが出来ます。

樋山先生は、とりわけ商学部の出身者らしく、こうしたビジネス的に意味合いが強くなった中国についての研究において、1996年4月から2014年3月まで、長期にわたって産業経営研究所の研究分科会の責任者として中心的役割を果たしてこられました。私自身もこの分科会のメンバーに参加させていただき、樋山先生から中国について多くのものを学ばせていただきました。

中国が急速な経済成長を遂げるにつれて、中国における企業や産業を本格的に研究をしようとする機運が商学部内で高まってきました。そこで、商学部の有志が「中国ビジネス研究所」というプロジェクト研究所を2005年10月に立ち上げ、この研究所は5年間存続しました。そのあいだ、樋山先生は同研究所副所長に就任されています。それによって、中国ビジネス研究所と産業経営研究所の樋山（中国）分科会が共同でかなり大規模なフィールド調査を行うことになりました。

第1回の調査研究は、まだ中国ビジネス研究所の立ち上げ前のことでしたが、日系企業が中国や東欧など計画経済から市場経済に移行した国々で苦戦している中、優れた成績をあげていた「日本精工」の中国とポーランドの現地法人の比較研究をすることになりました。2004年6月から7月にかけて、日本精工の石部工場、大津工場、そして藤沢工場といった国内工場に調査に出かけました。その後、8月末から9月初めにかけてポーランドのイスクラ工場の調査を行っています。翌2005年3月には中国に出かけ、日本精工の上海事務所、昆

山、Timken-NSK、東莞の現地法人の調査を行いました。

第2回の調査研究は、中国が「世界の工場」から「世界の市場」へと発展するにつれて、日系の流通企業やマーケティング志向企業が多く中国市場へ参入しつつあったので、その実態調査をすることにしました。まず、2006年3月に最初の現地調査を行い、北京のヨーカ堂やセブン-イレブン、上海のファミリーマート、日清食品、伊勢丹、資生堂、蘇州の住友電装などを訪問しました。続いて、同じ年の9月に上海のローソン、上海日清、イオン、ジャスコなどの調査を実施しました。そして、最後の調査は、2007年9月に珠海の北京師範大学珠海分校、順徳のイオンショッピングセンター、広州のファミリーマートやトヨタ、厦門の日本人商工クラブを訪問しました。とりわけ、北京師範大学珠海分校で、樋山先生が流暢な中国語で「日本精工の海外進出」についての講演をされたのは印象に強く残っています。

第3回の調査研究は、トヨタ、ホンダ、日産の日系自動車会社3社の進出によって、わずか10年で自動車産業の集積地となった広州の自動車産業に関するものでした。第1回の調査旅行を2009年3月に実施し、広東省経済貿易委員会工業処、広汽ホンダ、五羊ホンダ、華南日通、広州小糸、愛三、東風日産、花都区政府、広州三池、南沙区政府、デンソー、仏山ユニタイトを訪問しました。第2回目目の調査旅行は同年9月に実施し、広州市経済貿易委員会、東風日産喜龍専営店、同じく東神広大専営店、広汽ホンダ第一特約販売服務店、広汽トヨタ第一店、広州競馬場汽城、日郵物流(中国)広州支店、中山大学嶺南学院、広州日野、丸紅(広州)貿易、広汽トヨタを訪問しました。

これらの調査旅行には樋山先生をはじめ、宇野和夫や尹景春といった中国関係の先生方、現在ではすでに退職されてしまった宮下史明、鈴木宏昌、片山覚、厚東偉介といった先生方、そして商学研究科出身で他大学の教員になっている今井利絵(当時関東学園大学、現在ハリウッド大学院大学)、野村千佳子(山梨学院大学)、竹之内玲子(当時明海大学、現在山梨大学)、井上葉子(日本大

学)といった先生方,さらには当時博士課程の学生であった小原朋広さんや李雪(現在中京学院大学)さん,そして私自身が参加しました。

これらのフィールド調査では,実学重視の商学部の伝統を生かして,優れた研究成果を得ることができました。旅行中は皆で学問的な議論をするだけでなく,長期間にわたって生活を共にすることによって,お互いの連帯感がずいぶん高まったといえます。

これら樫山先生が3回にわたって参加されたフィールド調査の結果は,以下のような形で刊行されています。

鈴木宏昌・川邊信雄編『移行経済における日系企業—日本精工(株)の事例研究—』産研シリーズ41号,早稲田大学産業経営研究所(2007年6月)。

川邊信雄・樫山健介編『日系流通企業の中国展開—「世界の市場」への参入戦略—』産研シリーズ43号,早稲田大学産業経営研究所(2008年3月)。

樫山健介・川邊信雄編『中国・広東省の自動車産業—日系大手3社の進出した自動車産業集積地—』産研シリーズ45号,早稲田大学産業経営研究所(2011年1月)。

こうした長期にわたって,多数の研究者が参加するフィールド調査は,時として互いの専門家としての意見が対立して分裂し,長続きしないことが多いと聞きます。このような問題が生じなかったのは,中国生活が長く,洒脱でとりわけ中華料理に造詣の深い樫山先生のまとめ役によるところ大です。1日の調査を終えて,ホテルの近くのレストランで樫山先生の勤める中華料理を肴に,皆でビール,紹興酒,そして白酒を飲んで,楽しく語り合ったことは,参加者全員にとって,今では忘れることのできない楽しい思い出になっています。樫山先生の存在なくしては,これらの調査研究旅行は実現不可能であったことは

間違いありません。

このように、早稲田大学商学大学院において24年間にわたって大きな貢献をされた樋山健介先生が退職されたのはさびしい限りです。これからは、夏はカナダ、冬はベトナムやフィリピンなどの東南アジアで過ごしたいといわれている先生です。どこに行かれても中国人社会は大きいので、中国語で過されることも可能ではないかと思われます。また、引き続き中国の影響も強くなるでしょう。樋山健介先生のますますのご健勝とご発展をお祈りしたいと思います。(川邊信雄)

主要研究業績一覧

単行本

- 『日系流通業の中国展開—「世界市場」への参入戦略(産研シリーズ43)』(川邊信雄・樋山健介編, 早稲田大学産業経営研究所2008年3月)
- 『中国・広東省の自動車産業—日系大手三社の進出した自動車産業集積地(産研シリーズ45)』(樋山健介・川邊信雄編, 早稲田大学産業経営研究所2011年1月)

教科書

- 『中国語基本単語帳』(早稲田大学商学部中国語教室編2005年4月改訂版)
- 『商学部中国語Ⅰ&Ⅱ必携・中国語基本単語帳』(早稲田大学商学部中国語教室編2013年4月改定新版)

論文

- 「“突然”と“忽然”」(『JIAOXUE 教学』10号, 日中学院出版局1986年4月)
- 「主語の前に位置する介詞連語“在+場所”—語用論から見た分析」(『教学通信』9号, 中国語研修学校1987年11月)

「基本母音図を使った中国語母音の教学方法について」(『JIAOXUE 教学』12号, 日中学院出版局1988年6月)

「中国語のストレス(重音)とその教学方法について」(『文化論集』348号, 早稲田商学同攻会1991年9月)

「句首的处所词语带“在”的存现句」(『第三节世界汉语教学国际讨论会论文集』第三节国际汉语教学讨论会会务工作委员会编1991年11月)

「北京語ストレス(重音)に関する一考察——単語ストレスと語句ストレスの関係について」(『中国語学』239号, 日本中国語学会1992年10月)

「日本精工の中国進出プロセス」(鈴木宏昌・川邊信雄編『移行経済における日系企業—日本精工の事例研究(産研シリーズ41)』早稲田大学産業経営研究所2007年6月)

「主語の前に位置する介詞構造“在+場所”の機能と意味——中国語の《「在+場所」+主語+述語》に存在する2種類の文型」(『文化論集』34号, 早稲田商学同攻会2009年3月)

「主語の前に位置する介詞構造“在+場所”の機能と意味——“文章の展開機能”について」(『文化論集第』35号, 早稲田商学同攻会2009年9月)

講演

「中国とどう向き合うか」(コーディネータ総括) 早稲田大学産業経営研究所第31回公開講演会(早稲田大学井深大記念ホール, 2005年10月)

「跨国公司在华投资的案件—以日本精工为例」(招請講演) 北京師範大学珠海分校商学院(中国珠海市, 2008年9月)

以上